尋常性天疱瘡の口腔症状に関する検討

赤坂 庸子・神部 芳則*・古谷野浩美・野口 忠秀

Clinical study on oral findings of pemphigus vulgaris

Yoko AKASAKA・Yoshinori JINBU*・Hiromi KOYANO

Tadahide NOGUCHI

Abstract: Pemphigus vulgaris is accompanied by oral erosions in the overwhelming majority of cases. The authors studied oral findings at the first visit of 12 patients with pemphigus vulgaris.

1. In 9 cases, the chief complaint was pain of the gingiva and/or oral mucosa. In 2 cases, it was erosion of the oral mucosa, and in 1 case it was oral bleeding.
2. In 11 cases, erosion was observed in several regions of the oral cavity.
3. Erosion was frequently observed on the buccal mucosa, gingiva and hard palate. However, erosion of the alveolar mucosa and tongue was rare.

These results suggest that the characteristics of erosion differ depending on the region of the oral cavity which is affected.

Key words: pemphigus vulgaris (尋常性天疱瘡), oral findings (口腔症状), initial lesion (初発部位)

緒 言

天疱瘡は皮膚および粘膜に棘融解性水疱を生じる自己免疫性水疱症であり、中でも尋常性天疱瘡は発生頻度が高く、そのほとんどの症例で口腔内に症状が現れる¹⁾。われわれは、口腔粘膜における水疱形成のメカニズムをあきらかにするために、口腔粘膜上皮と皮膚の培養細胞を用いて基礎的研究を重ね、口腔粘膜上皮と皮膚の細胞では天疱瘡血清に対する反応様式が異なること、また、口腔粘膜上皮でも部位によって反応様式に違いのあることを示した²⁻⁵⁾。

そこでわれわれは、尋常性天疱瘡患者の口腔症状とその好発部位について検討し、すでに報告した基礎研究の

図1 年齢分布

結果と、臨床症状との関連について考察を加えたので報告する。

対象ならに研究方法

自治医科大学附属病院歯科口腔外科を受診し、尋常性天疱瘡と確定診断された12例（男性2例、女性10例）を対象とし、初診時の口腔症状について検討した。

結 果

対象症例の平均年齢は44.2歳で、年齢分布は40歳代が

自治医科大学歯科口腔外科学教室

(主任：赤坂庸子教授)

* 神奈川歯科大学放射線学教室

(主任：鹿島 勇教授)

Department of Dentistry and Oral Surgery Jichi Medical School (Chief: Prof. Yoko Akasaka)

* Department of Oral and Maxillofacial Radiology Kanagawa Dental College (Chief: Prof. Isamu Kashima)

受付日：平成5年2月9日

表 1 対象症例

症例 No.	年齢	性別	主訴	症状の認められた部位								
				軟口蓋	硬口蓋	歯肉	歯槽粘膜	頬粘膜	舌	口底粘膜	口唇	皮膚
1	48	F	痛み		○			○		○		○
2	66	F	痛み		○	○		○		○		○
3	55	M	痛み	○				○		○	○	
4	28	F	出血	○	○	○						
5	35	F	痛み		○			○	○		○	
6	57	F	痛み	○	○			○				
7	34	F	痛み	○		○		○	○	○	○	○
8	30	F	痛み			○						○
9	48	F	痛み	○		○		○		○		
10	48	F	荒れ		○	○					○	○
11	41	M	痛み			○		○				
12	40	F	荒れ			○	○	○

図 2 口腔症状の部位数別頻度

5 例 (42%) で最も多く、次いで30歳代が3 例、50歳代が2 例であった (表 1, 図 1)。最年少は28 歳で最高年齢は66 歳であった。性差については、男:女=1:5 で女性が多かった。

主訴については、歯肉、口腔粘膜の痛みが9 例(75%) で最も多く、口腔内の荒れ、びらんが2 例、口腔内の出血が1 例であった (表 1)。

口腔症状は1 例で口唇に水泡が観察されたが、その他はすべての症例で発赤の強いびらん状態を呈し、症例によっては、剝離した上皮の残存を認めたものの、水泡は観察されなかった。

口腔を軟口蓋、硬口蓋、歯肉、歯槽粘膜、頬粘膜、舌、口底粘膜、口唇の8 部位に分けて症状のみられた部位を検討した。症状のみられた部位数は3 部位が5 例 (42%), 4 部位が4 例 (33%), 1 部位、2 部位、6 部位がそれぞれ1 例ずつであった (図 2)。12 例中11 例 (92 %) で複数の部位に症状が認められ、平均3.3 部位に症状を認めた。部位別にみると、頬粘膜が9 例 (75%) で

図 3 口腔症状の部位別頻度

最も多く、次いで歯肉8 例、硬口蓋6 例の順であった。一方、歯槽粘膜は1 例、舌は2 例で最も少ない結果であった (図 3)。ただし、舌については症状のみられたのは舌縁部、舌下面であり、舌背に生じた症例はなかった。部位別の組合せでは、その頻度からもあきらかなように、頬粘膜、口蓋、歯肉の組合せが多かった。一方、12 例中口腔以外にも症状を認めたのは5 例 (42%) であり、他の7 例では症状は口腔内に局限していた。口腔以外に症状を認めた5 例はすべて女性で、上腕部、前胸部、背部、大腿部の皮膚、および外陰部に症状を認めた。口腔以外にも症状を認めた症例については、症例数も少なく、部位数や年齢、口腔内の部位との間に一定の

傾向はみられなかった。

考 察

尋常性天疱瘡は、そのほとんどの症例で口腔に症状が生じる¹⁾。しかし口腔粘膜に水疱が発生しやすい理由や口腔粘膜における水疱形成のメカニズムは不明である。われわれはケラチン中間線維とデスモゾームの分布状態を指標にして、口腔粘膜上皮と表皮細胞では天疱瘡血清に対する細胞の反応様式に違いのあること、また口腔粘膜上皮細胞でも、部位によって天疱瘡血清に対する反応様式に違いのあることを示した²⁻⁵⁾。そこで、われわれが示したような基礎研究の結果が、実際に臨床症状を反映しているかどうかを検討する目的で本研究を行った。

今回対象とした尋常性天疱瘡と確定した12症例はすべて口腔内に症状を認めた。性差については、女性の割合がやや高い傾向がみられたが、年齢分布については従来の報告とほぼ一致していた⁶⁻⁸⁾。

主訴については、歯肉、口腔粘膜の痛みが最も多く、尋常性天疱瘡の患者が歯科、口腔外科を最初に受診することが多い理由の1つと考えられた。また、痛みを主訴にした症例は頬粘膜、口蓋にびらんを認めた症例が多く、これらの部位は食物による物理的、化学的刺激を受けやすい部位でもあり、このことが痛みの発生に関係していると思われた。口腔症状の好発部位について Lamey ら⁹⁾は、尋常性天疱瘡患者30例について分析し、1例を除き複数の部位に症状がみられたこと、軟口蓋が80%で最も多く、次いで頬粘膜が46%であったのに対し、舌は舌下面と舌面を合わせて20%、口唇は10%と少なかったことを報告している。一方、Zegarelli ら⁷⁾は、尋常性天疱瘡患者28例について具体的に数字では示していないが頬粘膜、口蓋、歯肉に症状が多く、舌、口底粘膜、口唇は少なかったことを報告している。Zegarelli ら⁷⁾、Pisanti ら⁸⁾は天疱瘡の発症は人種により大きな差があることを報告しているが、Lamey ら⁹⁾、Zegarelli ら⁷⁾の報告はおおむねわれわれの結果に一致している。このように口腔内では、症状の現れやすい部位と現れ難い部位のあることが示された。そして、この結果は、すでにわれわれが示した細胞レベルでの天疱瘡血清に対する反応性の違いを反映していると考えられた。このような細胞による反応性の違いの原因については、上皮細胞のケラチン分子の発現状態の違い⁹⁾やプラスミンに高感受性をもつ、細胞膜構成成分の違い⁵⁾などが考えられる。今後われわれは、口腔粘膜における水疱形成のメカニズムに

ついて、さらに詳細に研究を進めていく予定である。

結 語

尋常性天疱瘡と確定診断された12例について、口腔症状および症状の現れた部位を検討した。その結果、

1. 主訴は歯肉、口腔粘膜の痛みが9例で最も多く、次いで口腔内の荒れ、びらんが2例であった。
2. 12例中11例で複数の部位に症状が確認された。
3. 部位別では頬粘膜が9例で最も多く、歯肉8例、硬口蓋6例で、歯槽粘膜、舌は少なかった。

部位別による症状の現れ方の違いについては、われわれが報告してきた細胞レベルにおける基礎研究を反映しているものと思われた。

引 用 文 献

- 1) 矢尾板英夫：水疱症（特集：皮膚疾患の病理診断）病理と臨床 2: 607-617 1984.
- 2) 神部芳則，井上俊一郎，他：ヒト培養口腔粘膜上皮細胞に対する天疱瘡患者血清の影響。日口外誌 34: 2091-2095 1988.
- 3) 神部芳則，北島康雄，他：ヒト歯肉部培養上皮細胞のケラチン中間線維およびデスモゾームの分布に対する天疱瘡患者血清の影響。日口外誌 35: 390-395 1989.
- 4) 神部芳則，赤坂庸子，他：ヒト歯肉部培養上皮細胞に対する天疱瘡患者血清の影響。日口外誌 38: 11-14 1992.
- 5) Jinbu, Y., Kitajima, Y., et al.: Different effects of pemphigus antibody and plasmin on the distribution of keratin intermediate filaments and desmoplakins between cultured oral and epidermal keratinocytes. J Dermatol Sci 3: 6-12 1992.
- 6) Lamey, P.J., Rees, T.D., et al.: Oral presentation of pemphigus vulgaris and its response to systemic steroid therapy. OS OM OP 74: 54-57 1992.
- 7) Zegarelli, D.J. and Zegarelli, E.V.: Intraoral pemphigus vulgaris. OS OM OP 44: 384-393 1977.
- 8) Pisanti, S., Sharer, Y., et al.: Pemphigus vulgaris: incidence in Jews of different ethnic groups according to age, sex and initial lesion. OS OM OP 38: 382-387 1974.
- 9) 神部芳則，井上俊一郎，他：ヒト歯肉部培養上皮細胞における細胞骨格の分布。日口外誌 34: 1055-1060 1988.